そういう授業を続けていただくと，みんながその子らしく授業に参加して，学校も楽しいなと感じていると思うんです。それは，教学指導課で言っていただいている「３観点」と合致してくるところだと思います。

（武田）

今，岸田先生のお話で，学級経営が上手というか，きちんとやっていて，教科指導もよいというクラスの子どもたちというのは，先生の指導・支援のよさもありますが，**もうひとつはやっぱり，子どもたちがつながっている。子どもたちが練られた人間関係になっているということではないかと思います。**情緒的な表現をすれば，失敗が許される教室。障害のあるお子さんというのは，どうしても失敗する。できない状況というのは当然ストレスがたまると思いますが，でも，自分の失敗を許されるという空間にいれば，それは，障害のある子どもだけじゃなく安心して生活できる。そういう人間関係がつながっていくところでは，人間誰にだって，得意なこととうまくいかないことがあるということを理解する。うまくいかないことの一つが，障害のあるお子さんたちの特性であるという理解。子どもたちは理屈を言わなくても，情緒的に分かる部分がある，そういうものをつくっているんじゃないかなと思いますね。

（百瀬）

その子の気になる部分ばかりに目がいってしまうと，教室自体が，「○○さんが失敗したよ」「○○さん，だめじゃないの」というような言い付け合いのような雰囲気になってしまって，何となくみんな殺伐としてしまう。そこで，**子どもたちをつなげることで心掛けているのは，配慮を要する子に対してどういう見方をしていけばいいのかということを，日常的に教師が示していくということです。**

更に，周囲の子がその子に分かるようにと伝えた言葉掛けのよさを見つけてあげたいなと思っています。「○○さん，今ねえ，□□さんに対して，こういうふうに分かるように言ってあげていたんだよ。先生も見習いたいな」なんて位置付けていくと，その子も嬉しいし，周りの子どもたちも，分かりやすく伝えようとする。低学年ですから，先生に褒められたいという気持ちもあると思いますが，次第にその子の助けになっている自分がいるということを子どもたちが意識できるようになってくると，すごく雰囲気がよくなってきます。そして，教師の側からも，「ありがとう」「助かっているよ」とか，「先生もお手本にします。その言葉の掛け方を見習いたいです」と言うことにより，その子だけでなく周りの子どもたちの意識を変え，その子が居心地よくなってくることは可能だと思っています。更に，**その子が居心地よくなってくると，それまで問題行動が多かった子どもが，穏やかな表情になってきて，みんなと一緒に行動できるようになってくる**こともよく見られる姿かなと思います。

（石川）

私が若い頃，学習に困難さを抱えるお子さんがクラスにおりました。その子は，非常に朝早く来るのですが，家庭環境の影響でご飯も食べて来られないため，私はコンビニのおにぎりを買ってあげたり，給食を大盛りにしてあげたりしていたのです。その子があるとき，「先生は優しい」と言いました。その先が聞きたくて，「先生のどこが優しいの」と聞いたんです。するとその子が言ったのは，おにぎりや給食のことではなくて，「算数が分からないときに，先生教えてくれたじゃん」と言ったのです。たまたま，その子が分からなくて困っているときに机間指導の中で，声を掛け，

その子と一緒に問題を解いたことを本当に忘れられないと言ってくれたのです。

それで，当時，先輩の先生が温かいのに比べ，自分が冷たいと感じていた私は，そうか，本当の優しさというのは授業なんだなというのをその子から教えらました。

学級づくりというのは，授業なくしては成り立たないと思います。そして，その授業の中で，子どもたちにかかわることが大切だと思います。やっぱり授業を大事にしなきゃいけないんだなと思わされました。

（武田）

本日のテーマ「全員が，楽しく『わかる・できる』授業」いわゆるユニバーサルデザインというものと，私どもの言っている「３観点」「ねらい・めりはり・見とどけ」ということについては，先程の岸田先生の話に尽きると思います。**授業というものは，こういうものがあるというものではなくて，先生と子どもが創り出す一つの物語ですからね。**そこには，物語のスタートがあり，終末がある。つまり，ねらいがあって，途中があって，最後があってというもの。そのときに登場人物に対してどういう配慮をしていくか，あるいは，子どもさんの特性に応じて視覚的にやっていくということもある。でも，要は先生と子どもが，どういうように４５分なり５０分の中でかかわって，どういうようにお互いに成長していくかが，物語そのものなので，そこにはきちんとした授業のねらいが当然あって，それを実現するために，どんなような活動があり，ステップを踏んでいくかというものがある。そして，子どもたちがどういうように成長したのかを評価するということがあって，そこは共通だと思うんですよね。

ですから，ユニバーサルデザイン化していくということは，障害のあるお子さんにより分かりやすい支援をしていく，これは一つ大前提。障害があろうがなかろうが，その子に分かりやすくしてくというのは，皆同じですから。教師として工夫や配慮をなすことは当然で，それ以上に子どもたち同士がお互いに，得意な子も不得意な子も元気のある子もおとなしい子もかかわりながら，そこに物語を創っていく，これは皆同じではないかと思っています。

（田中）

武田先生のおっしゃった**失敗を認め合える関係づくりが大事だ**と感じました。私も，違いを認め合える学級経営というのが，鍵かなと思っているのですが，発達障害のお子さんとかいろんな子どもがいる中で，違いをお互いが認め合っていかないと成り立っていかないし，認め合えることで温かいクラス集団になっていくと思います。結局行き着くところは，子ども同士がお互いのよさを認め合ったりとか，できないところをカバーし合ったりとか，そういうかかわり合いをすることができる学級集団づくりをすることが，学級経営の一番大事なところかなと思っております。

（武田）

全くそのとおりだと思います。**違っていいんだ，違うことが自分なんだと思えることが大事。**子どもたちは，特に中学生は，一緒じゃないと不安だと思う子が多い。でも，違って当然だし，違っていいんだ。だから，田中先生のおっしゃることに，私，大賛成ですよね。

（浅原）

それでは，まとめに近づけていきましょう。**「全員が楽しく『わかる・できる』授業」を進めるために，先生方が意識していること，あるいは大切にしたいこと**についてお話ください。

（石川）

一つには教師の専門性ということが大事になってくると思います。当然，障害を理解すること，教材を理解すること，何が大切かということを考えていくことも専門性につながっていくと思います。ただ一個人だけではどうしようもないと思います。私は特別支援教育のことは分からないことがたくさんあります。研究会でも「WISC って何ですか」「えっ，知らないんですか」と言われないかとドキドキしていたくらいです。**一個人ではなくて専門性の高い教員などとタッグを組んで授業に向かっていくことが大事**ではないかと考えています。

（田中）

特別支援教育といいますが，例えば神奈川県や大阪府では支援教育と言っています。発達障害云々ではなくて，いろんな状況に応じてニーズのある子どもに手だてを打つという考え方で当たり前のことだと思います。支援が必要なときも違う，今は大丈夫だけど手助けが必要なときもある，担任はそこをよく見て，理解して寄り添っていくことだと思っています。特別支援教育の視点は便利で，役に立つことがいっぱいあります。視覚支援，予定を示す，教材教具等についても，教師も楽になるし子どもたちも楽になるものだと思っています。それは特別なことではなく，突き詰めていけば子どもたちが分かりやすいようにするということで，ずっと前からやっていることだと思います。**特別支援教育はごく当たり前のことだという視点が大切だ**と思います。

（百瀬）

昨年度，国語の教育課程研究協議会の授業を受けました。その中で学んだことは，**今日のこの授業で何を大切にしたいか，何が大事なのかということを突き詰めて考えておくと，子どものつぶやきが，よさとして感じられる**ということです。つぶやきだから自信がないけれど，「一寸今聞いた？」「もう一回言ってみて」と採り上げることで，子どもが学習に位置付きます。やっぱり教材研究しておかないと，子どもの発想のよさを見つけてあげられないと常々感じています。そして，子どもの発想のよさを採り上げ生かすことで全員が楽しく学ぶことつながっていくように思います。また，分かっている子が，つまらなくならないようにしなければと思っています。つまずいている子どもに焦点を合わせていると，高いレベルに行きたい子どもがつまらなくなってしまう。授業の中で，目当てを新たに持たせるなど，より楽しく活躍できるようにしていくことも大切だと思います。「今日はあなたが活躍できるのよ」と前の時間に仕込むことでその子が輝けるときもあります。時にはシナリオを作って

授業を進めることもあります。そのようにして，先ほどの武田先生の「物語」をよりドラマチックに構成できたらと思っています。

（岸田）

楽しく「わかる・できる」を意識し，教師集団として頑張っていくことが大切だと思います。特別支援の専門性に限らず，もっと大きな「教師としての専門性」を高めていくことが大切だと思っています。授業力に係る板書・教材研究・学習課題の据え方等の専門性と，特別支援教育で培っている認知特性・行動特性等の専門性を持ち合っていくことが大切だと思います。一人一人の教育的ニーズに応じたインクルーシブ教育を考えると，専門性をコラボレーションしていくことが大切です。

そして，**やっぱり授業がすべてだと改めて思います。**どんな障害の重い子どもたちも，学校に来られない子どもたちも，皆，分かるようになりたい，できるようになりたい，学校に来たいということは基本的な願いだと思います。そのためには，**それぞれの専門性を出し合って，高め合って，学校全体の専門性が上がっていくことが大切**だと思います。

（武田）

全員が楽しく「わかる・できる」授業というものを考えたとき，全員の中には先生も入っていなければならない。先生が楽しくない授業は子どもが楽しいはずがないわけですよね。それは教材研究一つにしても，この教材を使って，できるようにしなきゃいけない，分かるようにしなきゃいけないという気持ちばっかりだと，教材研究もつまらないし，授業もつまらない。

ところが，ある教材を明日教室に持って行ったら，あの子はなんて言うかな。この子はどうだろう。あの子どもとこの子どもの考えを戦わせてみるとどうなるかな。そんなことを考える，こんな楽しいことはない。ワクワクしちゃうんですよね。でも，実際，授業やってみるとうまくいかない。それで打ちひしがれて帰ってくるそのパターンなんだけど・・・。

そのためには，子どもたちを知る，子どもたちを見ている，子どもたちを分かる，分かろうとするということですよね。**ただ分かるという中身には，認識として知的に分かるという部分もあるけれど，感じるという分かり方もあるんですよね。そういうことを感じられる私になる**ためには，教師自身がいろんなことに挑戦したり，いろんなものを見たり経験したり，そんな一つ一つの教師の営みが，実は子どもたちの分かる授業，楽しい授業につながっていくと思っています。今日来ていただいたことも一つの経験となって，感性を磨くことにつながっていけばと思います。

（浅原）

では，最後にこの座談会を通して**感じたこと**についてお願いします。

（百瀬）

言葉で普段やっていることを伝えることが難しいと感じる一方で，その言葉で伝えていただいて勉強になりました。武田先生がお話になった「授業は物語」だとか，岸田先生に授業をしていただいたら楽しいだろうな，とか思いました。**一人一人のよさに手を差し伸べること，それが特別支援の目線なのかな**と思いました。学級の子どもたちに接し，日々うまくいかないことがある中で，本日の座談会の中で気がつかない視点を教えていただき，それらを生かしたまなざしで子どもを見ていかなければならないな，やってみようと勉強となりました。

（武田）

わたしたち教師は授業のプロフェッショナルなんだと感じさせられました。**授業のプロフェッショナルとは，子どもを知っているということ**だと思います。ここにいる３人の先生に教わっている子どもは幸せだと思います。うまくいかないことはあるけれども，誠実に子どもに向き合い，最善のことをやっていく。いい先生たちだなと思いました。最後に一つ，学校というのは素晴らしい職場です。子どもと一緒に暮らさせていただいていることに感謝し，できることを精一杯やっていただければと思います。

（岸田）

私が以前，ADHD の児童の担任をしていたとき，周りの子どもに助けられました。周りの子どもたちは教師を見ていてよいと思った行動を取り入れます。先生が障害のある子どもを邪険に扱えば，そう扱うし，丁寧に扱えばそう扱います。授業でも周りの子どもたちが，「配慮はするが特別扱いしないこと」を理解してくれることが大切です。障害のある子に対しては，配慮が必要なのだと分かってくれる，このことが学級経営では大事だと思います。**障害のある子もない子も共に育っていくということ**が私の大切にしたい基本の考え方です。

（浅原）

本日は，「全員が楽しく『分かる・できる』授業」というテーマで座談会を行いました。私自身，司会をしながら，教師としての在り方や姿勢について学ばせていただきました。そして，その具体が日々の授業にあるということを実感いたしました。

最後となりますが，学級にはいろいろな子どもがいて，当然その中に配慮を要する子どももいるわけですが，そんな子どもたちも含めて，すべての子どもが輝く学校になっていけばと思います。**いろいろな子どもが共に学び共に育つ，そんな温かで懐の深い教育，社会**が推進されることを願いまして，本日の座談会を終了させていただきます。ありがとうございました。